寝覚研究の意義とその現況

鈴木弘道

一

狭衣・寝覚・浜松・とりかへばやなど、源氏物語以後に現れたいはゆる平安末期の長篇物語は、従来から源氏物語などとは比較にならないほど研究がたち遅れ、信頼性のあるテキスト・註釈書の類にしてもきはめて数少く、現在では古典文学関係の叢書からはほとんど除外される運命にある。(註一) このやうな研究のたち遅れには種々の原因があるけれども、やはり、これらの物語が単に源氏物語の模倣作品であつて、そのために文学的価値も非常に低く、研究の対象とするにはあまりにも無意義であるといふ考へ方が、一般に風靡してゐたのではないかと思はれる。確かに、模倣作品は模倣といふ点で独創味の乏しい作品には違ひない。けれども、文学作品がその社会の所産である限り、これらの模倣作品がいかなる社会の中に於て生まれたかを顧みることこそ先決問題ではあるまいか。

かの有名な「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」(註二)の歌によつても知られる通り、絶頂を極めた藤原氏の栄華は、とりも直さず平安朝貴族的文化の発達の頂点を示すものであつた。けれども一度道長の薨去に直面するや、藤原氏はもはやその権力を高める余地を失ひ、文化もまた停滞から破綻・分裂への一途を辿るよりほかに道がなくなつた。そこから生ずる一つの現象は(註三)過去に対する追慕であり、王朝の盛時を回顧して大作源氏物語の世界を憧憬する人々の多かつたであらうことは容易に想像されるのである。かの栄花物語の出現は、藤原氏の世界ともいふべき源氏物語の世界が当時の貴族によつて憧憬され、ありし道長時代を再び現実に呼び戻したいと願ふ風潮の起つたことによるものであつたといふ(註四)が、寝覚をはじめ平安末期物語の作者が源氏物語の世界を再現せんとして、むしろ積極的にこれを模倣したことは、栄花物語の場合と全く同一ではあるまいか。されば(註五)こそ、これらの物語は無名草子でも評論の対象とされ、明月記にその名が記載されるほか、風葉集に歌が収められたり、改作もされるなど(註六)、後世になつてもやはり相当の読者を獲得したものと考へるのである。したがつて、平安末期の物語に源氏物語の模倣が認められても、それは決して独創性の後退として理解し得る単なる模倣ではなくして、模倣すべき社会的制約によつて使用せざるを得なかつた一つの技巧と見なすべきであらう。これにつき松尾聰博士が、

かうしたあらはな模倣乃至は作りかへは、歌に於ける本歌取同

様、読者の既に知つてゐるといふ親近感を利用して、自己の作品自体に一つには親近感を喚び、一つには換骨奪胎の技巧を示さうとする一種の創作手法であり、必ずしも独創性が涸渇したための窮余の策ではないのである。(註七)

と述べてをられることは、まことに傾聴すべき御見解であると思ふ。我々は、これら平安末期物語が従来、源氏物語の模倣作品であるとして見捨てられて来たこととは逆に、今後はその模倣作品であるといふ点にこそ一つの意義を認めて、新しくこれらの物語を見直して行かねばならないと思ふのである。

以上のやうに、寝覚を含む平安末期の物語が源氏物語の模倣作品であつて、そこに大きな特色があるとするならば、その模倣は、どの場面をどんな風に行なつてゐるか、どういふわけで源氏のその部分を模倣したのか、といふことなどを具体的に検討するほか、あらゆる面で源氏物語と比較することが必要となる。つまり、平安末期の物語は源氏物語研究の一資料であり、それによつて、ますます源氏物語の真の偉大性が判明するやうにもならうかと思ふ。したがつて、源氏物語の影響を受けたこれらの物語を追究することは、結局、源氏研究の一環でもあると考へられ、この点、寝覚研究は決して無意義ではないと確信せざるを得ないのである。

源氏物語と平安末期物語との比較評論は、夙に藤岡作太郎博士の名著「国文学全史平安朝篇」にその詳細が見え、その後も宮田和一郎氏著「物語文学攷」・松尾博士の論文「源氏物語の中古文学への影響」(註八)・石川徹氏著「古代小説史稿——源氏物語と其前後——」所収「源氏物語の影響を受けた平安後期の文学」などに取り挙げられたが、これらの研究によつても、平安末期物語作者のすぐれた換骨奪胎の技倆を知ることができると同時に、源氏物語作者紫式部が、どれほど人生の真相を探究せんとする精神の持主であつたかを容易に理解することができるであらう。

平安末期物語の研究が源氏物語研究の一環であることを示す一例としては、最近、三谷栄一博士の発表された「源氏物語を中心とした具象的表現の展開とその意義——尾花か・女郎花か——」(註九)といふ論文がある。これは、源氏物語の桐壺巻の、桐壺帝が、亡き桐壺の更衣を想起するところに見える文の中で、河内本系統には「女郎花」とあり、別本系統には「尾花」とあつて、その「尾花」の正しいことを考証されたものである。ところが、考証に当つては、特に寝覚の具象的表現につき詳細に考察され、その寝覚関係の部分は、もしそれがなければほとんど結論は出ないといつてもよいくらゐに重要な位置を占めてゐる。したがつて、三谷博士のこの研究などは、まさに「源氏物語研究のための寝覚研究」といふべきもので、平安末期物語研究の一つの意義をはつきりと表はしてゐるやうに思ふのである。

従来、源氏物語の研究は、そのほとんどが積極的に正面からこれと取組むことに重点がおかれ、側面からこれを見直すことがあまりにも不活潑であつたのは、まことに片手落ちのごとき感がある。源氏物語研究のために、その模倣作品として特色を持つ寝覚などの平安末期物語を考究することは、一見、迂遠な作業に相違ないが、しかし、さうすることによつて、初めて、物語の連峯の上に一際高く聳え立つ秀嶺源氏物語の真の姿を発見し得るのみならず、物語展開

の史的考察が可能となるのではあるまいか。

二

次に、寝覚研究が現在どの程度まで進んでゐるかをいささか展望してみよう。もつとも、無名草子の寝覚評論以後に於ける、いはゆる寝覚研究史は、既に拙著「平安末期物語の研究」の中で取扱つた(註一〇)ことでもあるから、ここでは便宜上、(1)伝本の研究(2)作者・成立年代の研究(3)闕巻に関する研究(4)註釈的研究(5)その他の研究、の五項目に分けてその現況を整理し、以て拙著の内容を補充したいと思ふ。

(1) 伝本の研究

寝覚の伝本は、現在、原作系のものが七本、改作系のものが二本見られるだけである。その中、原作系のものは、前田本・竹柏園本(天理大学図書館本)・東北大学本・静嘉堂文庫本・上野図書館本・実践女子大学本と、昨年、新しく発見された松平文庫本とで、改作系のものには、中村本と神宮文庫本とがある。これら伝本に関する研究は、原作系の実践女子大学本・松平文庫本と改作系の二本を除いて、既に昭和八年に出た橋本佳氏編「校本夜半の寝覚」と藤田徳太郎・増淵恒吉両氏共編「校註夜半の寝覚」に委しく解説され、また特に前田本については、育徳財団発行の複製本にも解説がある。また、実践女子大学本といふのは、昨年九月に刊行された、関根慶子・小松登美両氏の「寝覚物語全釈」に詳細な論文が附載されてゐるが、それによると、これは竹柏園本から出た本らしいといふことである。松平文庫本については、現在のところまだ一般に公開されてゐないため詳細不明であるが、近く、松平文庫の全貌につき今井源衛氏等関係者の発表があると伝へ聞いてゐる。(註一一)これら七つの原作系伝本では、前田本が書写の年代も最も古く、善本と考へられるもので、註釈に際してはぜひとも参照しなければならないものと考へられる。ただ、七・八年前に光明正信氏(註一二)が、この前田本は後人の補正した本で、竹柏園本こそ最善本であると主張されたことがあるが、その論拠には一考を要するところがあつて、私はやはり従来通り前田本が最善本であると信ずるのである。これについては私もかつて部分的に述べたこともあり(註一三)、関根氏も「寝覚物語全釈」の中で一部取り挙げてをられるが、光明氏説に対する纒まつた反駁論はまだ現れてゐないやうである。

改作系伝本の中、中村本は古典文庫から金子武雄氏によつて翻刻刊行され、同氏の解説も載せられてゐる。また神宮文庫本は小西甚一博士が発見されたもので、中村本の巻二に相当する部分しかないが、鈴木一雄氏の詳細な研究が出てゐる。(註一四)これは、中村本を読む時にも必ず参考にすべき有益な論文である。なほ、この二本を比較された北川大成氏(註一五)によると、本文は神宮文庫本の方が優れてゐるやうであるから、今後、中村本を読む場合にはこの神宮文庫本を参照することも必要であると思ふ。

寝覚の伝本研究の現況は大体以上のやうであるが、藤岡博士が「国文学全史平安朝篇」で紹介された黒川本も未だに所在不明であるし、各伝本の系統表にしても、増淵氏が「校註夜半の寝覚」に附載された論文(註一六)で簡単に纒められた程度であるから、この方面の研究もなほ続けられねばならない。殊に、黒川本については、藤岡博士とほぼ同時期に大野木克豊氏が研究に着手され、その成果である

「寝覚物語考略」の紹介と「寝覚物語校訂」の抄出掲載が昭和八年八月号の「文学」に見られる。これは、「黒川本夜半の寝覚――寝覚に関するかくれたる研究の紹介――」と題するもので、当時の「文学」編輯室の人々によつて紹介されたものであるが、大野木氏の功績を讃へんとするあまり、黒川本が最善本であるかのやうな筆致であるのは賛成できない。(註七)このことは、関根氏も「寝覚物語全釈」の中で言及され、黒川本が必ずしも前田本より優れてゐるとは言ひ難いと結論された。とにかく、黒川本に関しても、なほ再吟味しなければならない余地があるやうに思はれる。

(2) 作者・成立年代の研究

寝覚の作者が菅原孝標女の作品であるといふ伝説につき、従来、これを肯定しようとして種々の根拠を挙げられた研究家はかなり多く数へられるが、中には否定的態度を表明する論者もあつて、未だに定説とはなつてゐない。従来の諸説のあらましは、既に鈴木一雄氏が「物語作者としての孝標女」と題して、要領よく整理されてゐるので、以下、簡単に述べることにする。

寝覚を孝標女作とする外部徴証は、言ふまでもなく更級日記の定家自筆本奥書と、拾遺百番歌合にある作者名註記などであるが、松尾博士や稲賀敬二氏等が言はれるやうに、定家が更級日記を書写する際に用ひた本に、既にこの奥書の記事が存在してゐたもので、必ずしも定家自身の考へを記したものではなささうであるから、これは単に一つの伝説に過ぎないものと考へられるわけである。また、拾遺百番歌合の註記も、前田本・図書寮本など、本によつては記載のないものもあり、これは後人の補入らしく思はれるから、結局、これらの記録のみによつて寝覚作者を孝標女と断定することは早計であると思ふ。そこで、あくまでもこれを仮定することによつて、好都合な証拠が現れたとすれば、この伝説の信憑性も高まることになる、といふ考へのもとに、いろいろな内部徴証を求めて、この伝説を肯定しようとした学者も極めて多い。また反対に否定的立場に立つ向きもあるが、特に最近では、孝標女が寝覚や浜松の作者であつてほしいと心の中で願ひつつも、寝覚・浜松の相異点を探して、両物語が同一作者でないといふことにならないか、即ち伝説は否定されるかどうかを検討されてゐる稲賀氏の研究は、注目に値する。けれども、伝説に対する有力な反証といふほどのものは、現在のところ、後述する山田勝弘氏の「寝覚物語成立私考」以外にほとんど挙がつてゐないし、文学史書などを見ても、一般に「孝標女作か」といふ妥協的な曖昧な表現の用ひられることが多く、やはりこの作者研究は浜松などとともに今後の大きな問題点であらう。

成立年代についても、現在、前記山田氏の論文を除いて特別に目ぼしい研究は現れてゐないし、作者研究と同様に今後更に論議されねばならない問題の一つとなつてゐる。これに関する特異な研究として、以前に、菊沢季生氏が文法的考察から、この物語は孝標女の作ではなく、院政以降の成立であると論じられたことがあるが、これは既に松尾博士によつて疑問とされてゐる。(註二三)山田氏の研究は、いはゆるモデル論に関した注目すべき新しい研究で、既に本年三月、京都大学王朝文学会に於て発表されたものを最近小冊子に纒められたものである。モデルに関しては、石川氏の「平安小説研究と栄花物語」(註二四)が有名で、そこには寝覚の対の君を中心としたモデル論が展

開されてゐる。山田氏は更にこの説を受けて、寝覚の登場人物には院政期の実在人物をモデルにしたと思はれるものがあり、したがつて寝覚は院政期の成立であり、作者も非孝標女であらうと結論されてゐるが、モデルの適否如何を虚心坦懐に再検討することが今後に残された問題であると思ふ。なほ、寝覚が浜松などと比較して、いづれが先に成つたものかを考察することも重要な問題であるが、その方法として、(イ)寝覚・浜松作者を同一の孝標女と仮定すること、(ロ)両物語の作者が同一でないと仮定すること、(ハ)非孝標女作と仮定すること、などがあると考へられる。私もほんの試みに、(イ)の方法を用ひ、使用語句・文章・和歌の総数などの形式的方面、及び夢・故事伝説・官能的描写・和歌の特色などの内容的方面から、両物語の異質的現象を比較し、孝標女晩年の心境を推し量つて、一応、寝覚が先、浜松が後といふ結論を出してみたことがあるが、(註二五)松尾博士の書評(註二六)にもあつたやうな、反論的疑問の起り得る面も確かにあるやうで、これもやはり再検討が必要であらう。

(3) 闕巻に関する研究

この物語には、中間と末尾にそれぞれ大闕巻があり、この内容を想定して物語本来の姿に復原させようとする試みが、長く基礎的研究の大きな分野となつて来たのは当然のことである。松尾・橋本・増淵諸氏の研究(註二七)はそれぞれ有益であるが、その中でも松尾博士の研究が最も緻密・精細なもので、博士は、闕巻部分の内容を推定させる諸資料を拾遺百番歌合・風葉集・無名草子・寝覚絵巻詞などから探索され、一応、その内容も判明するやうになつた。当時は、この闕巻考証に役立つ中村本が所在不明のため、藤岡博士の纒められた中村本梗概(註二八)を頼りとしつつ、これらの困難な作業を継続されたものであるが、中村本が既に世に出た今日としては、改めて検討をし直す必要があつて、先程触れた鈴木一雄氏の研究などは、中村本巻二に当る神宮文庫本による研究とは言へ、闕巻に関する研究としても高く評価されねばならないものと思ふ。また、「寝覚物語全釈」にも小松登美氏の大部な研究が載せられてゐるが、これは中村本をも参考にした闕巻考証としては画期的なもので、今後は長谷川和子氏の「夜はの寝覚物語大略」(註二九)とともに必ずこれを踏台にして研究を進めるべきものと信ずる。

このやうに、闕巻に関する研究に新資料の中村本を利用することは、まことに大切なことであるが、中村本が改作本である以上、これを利用するには、その性格とか改作の実態など、中村本そのものを追究しておかなければ、かへつて利用の方法を誤ることもあり、寝覚の本格的な研究は実に中村本研究から始まると言へば、言ひ過ぎかも知れないが、とにかく、この中村本研究は重視されねばならないであらう。前掲拙著の中に数篇の中村本に関する論考を収めたのもこの意味に於てである。

中村本については、藤岡博士の「国文学全史平安朝篇」に簡略ながらもその梗概が載せられてゐるが、何と言つても古典文庫本の金子氏の「解説」は最も総合的な研究で、種々の角度から解説されてゐる貴重なものである。しかし、その中にはなほ綿密な吟味を要するところがあつて、その後も原作との比較の上に立つて考察した論文が次々と現れてゐる。(註三〇)要するに、中村本の研究は決して単に中村本のための研究に終つてよいのではなく、原作闕巻考証、闕巻散佚

時期の推定、原作の註釈、鎌倉時代以後盛に行はれた物語改作現象究明、等々にも役立てるところがなければならない。

(4) 註釈的研究

従来、この物語の註釈書としては、頭註だけの藤田・増淵両氏の「校註夜半の寝覚」が唯一のものであつたが、それに代つて昨年「寝覚物語全釈」の刊行されたことは、何よりも学界の慶事として心から著者関根・小松両氏の御努力に敬意を表したいと思ふ。ただ、「語釈」に精粗の目立つことは惜しい。「餘考」も極めて参考になるが、全体としてはまだ簡単な気もするし、体裁なども、活字が頁一杯に詰まり過ぎていささか読みにくいやうにも思ふが、もちろん、これらはあまりにも寝覚の本文の分量が多く、厖大な書物になるのを防がうとされたところから、やむを得ずなされた処置ではないかと想像されるのである。とにかく、全部の本文に「通釈」「語釈」「餘考」などが揃つて附いたといふことは、まことに喜ぶべきことで、今後は誰もが容易に寝覚を読むことができるやうになつたわけであるから、この「寝覚物語全釈」の説を再検討するなど、寝覚の研究は目ざましく進展するのではないかと思ふ。

平安末期の物語を特に愛好されてゐる中村真一郎氏が、現在、宇津保や狭衣や寝覚などの王朝物語に、よい本文と註釈のないことを指摘されて、本文を整備したり解釈したりする段階に至るまで自分たちが無智の状態に置かれてよいはずもなく、普通の作家などが、文学史上に大きい名前を載せてゐる作品を読むのに、一々図書館へ行つて探すなど実に不自然だと、手きびしく国文学者を批判され、国文学者への註文の第一として、「古典の註釈つきのテキストが自由に手に入れられるやうにしてほしいこと」を挙げられたことがある。(註三二)もちろんこの批判は、国文学者に対するよりもむしろ出版関係の事業に当る者に対して向けられるべきものではあるが、少くとも寝覚に関しては、この「寝覚物語全釈」のおかげで、中村氏の要求も満たされることになるわけである。なほ、寝覚の註釈を早くから志してをられた先学に石川氏があり、「宿執悲恋夜半の寝覚」(註三三)と題して雑誌「むらさき」に連載されてゐたことがあるが、完結しなかつたことはかへすがへすも残念である。

寝覚の現代語訳には、河出書房新社から刊行された「日本国民文学全集」第六巻「王朝物語集」Ⅱや、その改訂版の「日本文学全集」第三巻に、円地文子氏のものがあり、寝覚を骨子とした創作には、河出書房から出た中村真一郎氏の「王朝小説集　恋路」所収の「寝覚」があるなど、確かに寝覚は、国文学者以上に文壇の人々がこれを大衆に直結させようと注目してゐるやうであるが、「寝覚物語全釈」の出たのを契機として、国文学に携はる者は、更にこの物語に関する指導者的立場に立たねばならない。

(5) その他の研究

寝覚物語絵巻は、末尾闕巻内容の想定にぜひなくてはならぬ資料であるが、現在、これに関する研究はほとんど停滞してゐる様子である。角川書店から刊行されつつある「日本絵巻物全集」などには、この寝覚物語絵巻は当然収められて然るべきであらう。

また、寝覚の題号が、本来「寝覚」「夜半の寝覚」「夜の寝覚」「寝覚物語」などのいづれであつたかといふことに対する研究としては、関根氏のものが唯一のもので、関根氏は「ねざめ」とする考(註三三)

へ方を持つてをられるやうである。なほ、この物語はもちろん平安末期物語の総合的研究として石川氏の「古代小説史稿―源氏物語と其前後――」、三谷博士の「物語文学史論」があることを忘れてはならない。

三

以上、寝覚研究の意義とその現況について述べたが、要するに寝覚研究はまだ基礎的な研究の範囲をほとんど一歩も出てゐないし、その基礎的研究も決して十分進められてゐるとは言へない有様であつて、評論的な研究などは永井和子氏のものぐらゐではないかと思はれる。今後、我々はこの寝覚を含めた平安末期物語に、(註三四)より一層の深い関心を持つて、この荒野の開拓に精進すべきであらう。(註三五)

(註　一)　狭衣・浜松・とりかへばやは、明治以後の国文学関係の叢書（例へば「日本文学全書」「国文大観」「校註国文叢書」「校註日本文学大系」など）中にしばしば収められて来たが、最近では、浜松が「新註国文学叢書」に収められたのみで、現在刊行中の「日本古典文学大系」「日本古典全書」「日本古典鑑賞講座」には三作品とも取り挙げられてゐない。寝覚は、従来の叢書とは全く無関係で、単行本として橋本佳氏編「校本夜半の寝覚」、藤田徳太郎・増淵恒吉両氏共編「校註夜半の寝覚」、関根慶子・小松登美両氏共著「寝覚物語全釈」がある。なほ、浜松には尾上八郎・松尾聰両博士共編「尾上本浜松中納言物語」があり、また「古典文庫」には四作品の翻刻がある（ただし、浜松は末巻のみの、寝覚は中村本の翻刻）。

(註　二)　藤原道長。小右記（寛仁年十月十六日条）・袋草紙（巻一）・続古事談（第一）

(註　三)　他の現象としては、新機軸を生み出さうとして奇矯に走つたことも挙げられるであらう。

(註　四)　津田左右吉博士著「文学に現はれたる国民思想の研究」第一巻　四七六頁。

(註　五)　天福元年三月二十日条。

(註　六)　お伽草子「狭衣」とか中村本寝覚など。

(註　七)　「源氏物語の中古文学への影響」（創元社版「源氏物語講座」第三巻所収）

(註　八)　「註七」参照。

(註　九)　「国学院雑誌」第六一巻第七号所載。

(註一〇)　第一篇　夜半の寝覚　序説　第一節　夜半の寝覚研究史

(註一一)　昭和三十六年一月十三日に東京の大隈会館で「松平文庫について聞く会」が開催され、今井氏の有益な中間報告があつたが、その時の模様を紹介された鈴木一雄氏の「開かれる国文学の宝庫」（「言語と文芸」昭和三十六年三月号所載）によると、松平文庫本夜半のねざめは、前田本に近い様子である。なほ、ほかに個人的に今井氏から御教示をいただいたが、誤解を招く恐れもあるので、関係者からの正式な公表を待つことにしたい。

(註一二)　「よはのねざめの伝本研究――前田家本の再検討――」（「国文学論叢」第四輯所載）

(註一三)　拙稿「寝覚註釈覚書――天人降下事件より密通事件まで――」（「平安文学研究」第二十一輯所載）・拙稿「寝覚註釈覚書

（続）」（「平安文学研究」第二十三輯所載）

（註一四）「神宮文庫本『よはのねざめ』について」（「国語」昭和二十九年四月号所載）

（註一五）「神宮文庫本『夜寝覚物語』について――中村本本文との比較――」（「平安文学研究」第十七輯所載）

（註一六）「夜の寝覚物語の研究」

（註一七）拙稿「黒川本夜半の寝覚最善本説批判」（「平安文学研究」第二十五輯所載）・拙稿「黒川本夜半の寝覚最善本説批判（承前）」（「平安文学研究」第二十六輯所載）参照。

（註一八）「国文学」昭和三十二年十月号所載。

（註一九）続古今集に孝標女作として採られた二首が浜松に見えるので、このことも傍証とならう。

（註二〇）「更級・浜松・寝覚に描かれた可笑味に就いて――更級日記奥書所載の更級・浜松・寝覚同作者伝説を確実化させようとするための試論の一齣として――」（「国語と国文学」昭和十年八月号所載）・「夜はのねざめ」（久松潜一博士編「日本文学史　中古」所収）

（註二一）「形式的処理による一つの場合――寝覚・浜松に関して――」（「国語と国文学」昭和二十五年十二月号所載）・「寝覚・浜松の位置――位置づけの前提条件の一考察――」（「国語と国文学」昭和三十四年四月所載）

（註二二）「『夜半の寝覚』の成立時期に就て――文法的考察から――」（「文学」昭和十年五月号所載）

（註二三）「註二〇」に掲げた論文・「夜半の寝覚闕巻補考―附、末巻梗概――」（「文学」昭和十年十一月号所載。「平安時代物語の研究」にも収録）

（註二四）日本古典全書「栄花物語」（四）附録。

（註二五）前掲拙著　第二篇　浜松中納言物語　第一章　夜半の寝覚・浜松中納言物語の成立順序―作者を菅原孝標女と仮定して―

（註二六）「国語と国文学」昭和三十五年七月号所載。

（註二七）松尾博士「菅原孝標女――その作品『夜半の寝覚』の形態について――」（岩波講座日本文学。「平安時代物語の研究」にも収録）及び「註二三」に掲げた「夜半の寝覚闕巻補考―附、末巻梗概――」・橋本氏「夜半の寝覚について」（「校本夜半の寝覚」所収）・増淵氏「夜の寝覚物語の研究」（藤田氏との共編「校註夜半の寝覚」所収）

（註二八）「国文学全史平安朝篇」

（註二九）松尾博士著「平安時代物語の研究」所収。

（註三〇）前掲拙著附録「平安末期物語研究文献目録」参照。なほその他の文献として、大槻節子氏の「中村本『夜寝覚物語』の改作態度――人物の性別の変更及び女主人公第四子の想定について――」（「平安文学研究」第二十三輯所載）もある。

（註三一）「文学のひろば」（「文学」昭和三十四年九月号所載）

（註三二）「むらさき」第八巻第二号より第七号まで。ただし、第六号を除く。前掲拙著附録「平安末期物語研究文献目録」には脱落してゐたので、今補っておく。

（註三三）前掲著書。

（註三四）「『ねざめ』の構造」（「平安文学研究」第二十五輯所載）

「夜半の寝覚」（秀英出版刊、阿部博士著「中古日本文学概説」所収）・青木生子氏「王朝後期物語」（弘文堂刊、青木氏著「日本古代文芸における恋愛」所収）

――附　記――

本稿は、昨年十一月三日、池坊学園短期大学に於て開催された平安文学研究会第六回学会に発表した「寝覚研究の現段階」の草稿を補訂したものであるが、特に松村博司・石川徹両氏から種々御指導を賜つたほか、その後も、今井源衛氏からは松平文庫本について御教示をいただき、山田勝弘氏からは「寝覚物語成立私考」なる小冊子をわざわざお送りいただいた。ともに記して厚く感謝申し上げる次第である。なほ、横山由清自筆本夜半の寝覚の転写本が上野図書館本の由（川瀬一馬博士著「日本書誌学之研究」九三五頁―九四〇頁）、右自筆本についてはここには触れなかった。

―昭和三六・八・二二―

（註三五）前掲拙著附録の文献目録には、その「凡例」に示した通り、江戸時代以降昭和三十四年二月までに発表されたものを収載したが、それ以後昭和三十六年六月までの寝覚関係の主要文献で本文に取扱はなかつたものを、ここに纏めて掲げる。――松尾博士「古代後期の物語」（岩波書店刊、日本文学協会編「日本文学研究必携　古典編」所収）・中村氏「竹取物語　伊勢物語　落窪物語　夜半の寝覚　解説」（河出書房新社刊「日本文学全集3」所収）・三谷博士「物語の行方」（「国語と国文学」昭和三十四年四月号所載）・拙稿「寝覚・浜松・更級の歌に関する考察」（「論究日本文学」第十一号所載）・増淵氏「接続助詞『て』の用法――古文解釈のための文法――」（「学燈」昭和三十四年十二月号所載）・拙稿「前田本寝覚の異文覚書」（「平安文学研究」第二十四輯所載）・中村氏「源氏亜流物語の現代的意味」（「文学」昭和三十五年四月号所載）・三谷博士「意外に開拓されていない物語の研究」（「国文学解釈と鑑賞」昭和三十五年五月号所載）・阿部秋生博士